

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第154回例会記録 2021.4.8

《教育で大切なことは、コロナ危機を通して?》

「日本における教育というテーマは問題が広くて深く、具体的な課題を通して教育とはどういう営みで、何が大切なのかを話し合いたいと思ったが、そこに至るのは難しいと改めて思った。引き続き今後も議論していく必要があります。」

問題提起 吉田千秋(主宰)

- 今日、教育で大切なことは何なのか、を考えたいと思います。日本の教育は特異なものです。日本人は日本の教育がその根本において他国のそれと違ったものであることに気付いていません。欧米の学校を訪ねると、先ずその外見が違っていることに注意を惹かれます。日本の学校は校舎の前に大きな運動場がありますが、欧米の学校にはそういうものがありません。明治維新以来、学校は富国強兵の国策に必要な人間を育てるという役割を担って来ました。運動場が大きく、体育が必須科目であるのは、兵士となる人材の育成を目的とした戦前の軍国主義教育の産物がそのまま残っているということなのです。
- 昨年初頭より続くコロナ禍の制約という状況において、日本の教育の問題点が幾つか見えて来ました。教育の問題は様々な観点から捉える事ができます。教師の役割は何か、学校の役割は何か、家庭や地域はどういう役割を果たすべきなのか。会社は何ができるのか。世界の多くの国で、宗教がしばしば教育上大きな位置を占めていますが、日本の教育で宗教はほとんど何の役割も演じていません。以前は、学校は学校で、自分の家には独自の教育があると考える日本人の少なくありませんでしたが、現在、日本人の多くが、学校を唯一無二の教育の場所と見なしています。その意味で教育は完全に学校化したと言えます。そのため教師の負担は自ずと大きなものとなっています。
- 学校は以前にもまして結果を出すことを求められています。教育はますます競争主義や能力主義によって支配される様になってきました。文科省が教育行政を通じて大きな力を行使することがまた教育を歪める結果になっています。文科省は成果を求めて、上から学校教育を指導管理しようとしています。教育現場では管理



- 主義や権威主義が横行します。文科省の方針がしばしば一貫性を欠いたり、不徹底であったりすることも、現場を混乱させる状況になっています。
- このコロナ禍で明らかになった課題の一つが多人数教育の解消です。密を避けるために少人数教育をせざるを得なくなり、国民の要求で一クラス35人とする方向が出されてきました。よいことです。こうした個別課題のほかに、日本の教育には二つの大きな問題があるように思われます。教育の経済的負担を個人に転嫁している問題と、激しい学力競争を強いる学歴社会の構造問題です。
- まず教育費について。教育に懸る費用全体に占める国費の割合は、先進国の中で低いレベルにあります。教育の経済的負担は家庭に強いられているということです。米国はしばしば私立の学校・大学が多いと思われていますが、授業料の割安な州立大学が相当数あり、教育に占める公的負担の割合は日本ほど小さくありません。日本国憲法は全ての国民に教育の機会を権利として保証し、義務教育は無償と明記しています。



だが、給食費を払えない生徒や、修学旅行等に参加できない生徒少なからずおり、コロナ禍で家庭の所得格差による教育格差が拡大していると言われています。こうした事が子どもの心に及ぼすマイナスの影響は決して小さくありません。60年代に初めて小学生が自殺する事件があって以降、年ごとに増加し、大きな社会問題になっています。もっと真剣に経済格差など子どもの生活環境の背景にある問題に取り組む必要があります。

- もう一つの問題は、子どもを偏差値によって序列化し、激しい受験競争に駆り立てる学歴社会の弊害です。少子化で人口減少が急速に進む社会で、街の様子を見ると高齢者の養護施設の他に学習塾の増加が目につきます。それは受験がビジネスの対象となっていることの表れでもあります。しかし受験競争は何のためなのでしょう。それが本当に満ち足りた人生を送ることにつながるのでしょうか。しかも受験は単なる個人間の競争を越えて、学校間の評価をめぐる競争になり、教育現場への過度な締め付けにもなっています。上からの締め付け、序列主義の横行が、日本の教育を大きく歪めています。この序列主義において、最終的に上に立つことのできる者は一人しかいません。理論上、頂点に立つ一人を除いて、皆誰かの下になることになって、劣等感を持たされることになります。序列の外に立とうとする者は落ちこぼれとして排除されてしまいます。よく日本の子どもは自己肯定感が乏しいと言われる。それは常に劣等感を持たせる教育の当然の結果と言えます。
- 卒業して、直ぐに会社に入らない者が就職機会そのものを失って、通常の世界生活が送れなくなることも、序列主義の問題と関係しています。一度序列の外に出た者は容易に元に戻ることはできません。バブル崩壊

後、“就職氷河期”と呼ばれ雇用情勢が著しく悪くなった時代がありました。偶々この時代に大学を卒業した人たちは、企業が採用を控えたために希望する就職先を見付けることができませんでした。その後、この世代の人たちは採用の対象外となって、満足な職を得ることができませんでした。新卒者を一度にまとめて雇用する日本の慣行がこの世代の人たちの不幸となりました。能力的に問題が無いのに、チャンスを与えられないで、安定した人生を送ることのできない世代を作ってしまった。これは日本の常識が世界の非常識である典型です。

- 以上の二つの重要な課題を解決しようとする姿勢が政府にはありません。むしろこのコロナ禍の中で、新たな混乱おもたらせています。それは社会のデジタル化の一環として、デジタル教育を推し進め、将来を担う若い世代の情報活用能力を育成する取り組みを本格化させようとしていることです。コロナ禍で対面授業ができず、遠隔教育を行う必要もあって、計画の前倒しで生徒一人ひとりにパソコンを用意することになりました。慌てて決めたためか、誰がパソコン使用の指導するのか、誰が修理代等の経費負担をするのか、様々な問題についてはっきりしないことも多く、準備不足を否めません。
- コロナ禍が長期化して、初めは休校を喜んだかもしれない子どものストレスも大きくなっています。以上の様に議論すべき教育の課題は沢山あります。先ず何より一番肝心の問題、教育はどうあるべきか、学校教育の目的は何か、といった根本の問題を議論することが必要ではないでしょうか。抽象的な理念はどうあれ、学校は先ず友だちを見つけ、一緒に楽しく学べる場であらねばなりません。誰もが、最終的に、自立して生きられる一人前の人間になる必要があります。もちろんこの“一人前”が何なのかが議論の余地のある大きな問題です。大学出ていなくても“一人前”でないのか、とか。
- さらに、日本の教育は知性優先で感性を疎かにする傾向があります。日本人は有名な学校を出た高学歴の人は人間としても優れているかのように思いがちです。教育は人間観の問題に左右されます。日本では伝統的に上の者が下の未熟なものを「教え」、自分の様な人間に「育てる」ことが「教育」だと考えられて来ました。対照的にヨーロッパでは、英語でも、ドイツ語でも、“教育”は“引き出す”、“導き出す”という動詞から派生した言葉です。西洋哲学の祖と言えるソクラテスは、教師の役割を産婆に例えています。日本人の教育観は未だに明治維新後に生まれた国作りのために役立つ

人材の養成という教育目的の影響を脱することができません。

また、教職はかつて「聖職」とされ、教師は偉くていつも正しい人だと見なされました。もちろんそんなはずは無いのです。一つの答えがあって、教師はそれを知っている人であることが、日本の教育の前提となってきました。ここに大きな問題があります。本当は答えが幾つもあったり、はっきりした答えが見つからない場合も少なくありません。後から教えが間違っていたと判明することもあるでしょう。答えを求めて考えるプロセスを大切にすることが重要です。昔ほどではあり

ませんが、日本では「考えてはいけない」「上に従っていれば好い」「疑問を呈するな」の権威主義の風潮が消えていません。

•未だに多くの不合理がまかり通っています。いわゆる「校則」の中にはそうしたものが多く含まれていますが、この間、制服についての新しい考え方が出てきています。制服を自由に選べる様にしてはどうかという提案です。時代に沿わない不合理を克服する必要があります。そのための発言・行動を励ます方向が強く求められています。今日は、これらの諸問題について自由に交換できればと思います。

意見交流

* ちなみに、女子生徒もスラックスをはいていた時代もある。スラックスが悪いはずは無い。

* 日本人が日本に留まる限り、日本の教育が如何に特異であるかに気付くことは稀かもしれない。長くドイツに滞在した経験から言えることは、ドイツの子どもたちは日本の子どもたちほど勉強のストレスが大きいということ。日本の子どもは可哀想なくらい、常に受験勉強に迫られる生活を余儀なくされる。日本人の目に、ドイツの子どもは非常にのんびりしていると映る。宿題が出ない訳ではないが、授業の準備のために、毎日何時間も机に向かって勉強しなければならないということはない。教科書は、生徒の数だけ学校に備え付けられていて、前の世代から引き継いで使う。日本の様に毎年一人ひとりが新たに購入することはない。皆、勉強は基本的に学校でするものと理解している。

* ドイツは進学コースとか実技コースとか、三つ異なる進路があって12歳位で決めてしまうと聞いている。若くして将来を決めてしまうのは、残酷ではないか。

* ドイツ国内でそういう批判は以前から存在している。ただ進路を成績だけで決める訳ではない。教師は助言をするだけで、子どもが進むコースを決めるのは保護者である親である。例えば、親が職人で、工房でも持っていれば、当然、子どもに家業を継いで欲しいと考える。近年進学コースであるギムナジウムへ進むことを希望する者が増えている。それなりの学力が必要であるため、教師は成績を考えて当該の生徒が授業についていくことが困難であると判断すれば、他の選択を勧めるだろう。しかし決めるのは生徒の側、保護者である親が最終的に判断する。実際、進学コースの授業について

行けずに、途中で進路を変える者もいる。重要な点は、試験の結果を絶対視しないことである。基準を満たせば、大学の入学資格は得られる。入学資格に評価点が付けられるが、日本の偏差値の様な細かな区分ではない。基本は入学資格を持つ者は希望する大学で希望する学科を専攻することができる。但し大学の大衆化が進み、学生数が増加していて、医学部など将来の保証がある学科に学生が殺到する傾向があって、学科によって定員を設けている。その場合、大学側が学生を選ぶことになる。しかし、大学側は単純に成績順ではなく、様々な要素を考慮して学生を選ぶ。もちろん選考は恣意的なものでなく、ルールははっきり定められている。例えば、医学部で言えば、定員の20%を成績順で選び、後は順番を待っている期間を考慮されたり、病院や養護施設などでの社会奉仕活動で、入学資格の点数が高くなる。選考する側はガリ勉の秀才を医者に適した人材だと判断しない。

* 日本の若者の多くは自分でも何がしたいか分かっていない。進学の目的性そのものが曖昧である。自分の人生を考える機会がない。学校はそういう場になっていない。

* 教育にかかる費用は高い。日本で4年間大学に通えば、約1千万円程必要になる。何をしたいか分からないまま大学へ入り、卒業して、多くはどこかの会社に就職する。問題はしたら幸せになれるかである。

* 勉強するのは、できるだけ良い学校へ入って、良い会社にはいるため。生活するためにはお金を稼ぐ必要がある。多くの日本人は、安心安全の人生を送るためには、大きな会社に入って安定した収入を得ることが欠



かせないと考えるから。でも学校は、生きることを教えないし、経済やビジネスのことも教えない。教育はどうしたら一人で困らずに生きていけるかを教える必要がある。

* コロナ禍で在宅勤務が増えている。この間、業種によっては在宅勤務で差し支えないものがあることがはっきりした。在宅にして通勤にかかる時間や事務所を確保する経費を削減した方が賢明である。学校にも同じ事が言える。皆が集まって、同じ場所で授業を受ける必要は無い。

* デジタル社会の到来で、遠隔授業や在宅勤務が一般化するのではないかと。パソコンが無償給付され、どこに居ても誰もが同じ授業を受けられるようになる。

* 日本の教育は一人ひとりの子どものあり方を考えて来なかった。教師の関心は主に生徒にどうやって教科を教えるかにあった。人としての子どもの成長を促す、総合教育が必要である。

* 教師同士が教育について意見を交わし皆で一緒に考えるってことがなかった。大事な機会を逃してしまった。教える人間が先ず教えるってことを考える必要がある。

* 現在世界のほとんどの学校で、一人の教師が多数の生徒を同じ時間内に教える教授方式が取られている。これは大教授法(一斉教授)と呼ばれるものだが、岐阜では最も古い小学校である加納小学校で実践された。一度に共通の内容を教え、情報を共有でき、共通の学力形成に役立つ利点がある。反面、教師の押し付けになる危険もある。日本では結局従順な労働者を作るために役立てられた。日本の学校は校則を作って、ああしろ、こうしろと言って、とかく生徒を管理したがる。

* 政府はクラスを小さくしようとしているが、35人クラ

スを少人数というのはおかしい。一人の教師が対応できるのは精々15人程度である。

* 日本の学校は勉強とは全く関係の無いことで生徒を管理しようとする。またドイツの話になるが、髭を生やしている生徒(日本の高校生に相当する年齢)もいれば、女性と同様の長い髪の男子生徒もいることに驚かされた。服装や髪の毛のことで教師から何か言われることはないと言う。

* 高校生を元気づけることを目的とした“カタリバ”と称するNPOの取り組みがある。学生のボランティアが学校に出向いて、2時間ほど高校生と語り合っ、「今日からできる行動」を働きかける。日本の若者は非常に否定的な世界観、人生観を持っている。二人に一人は自分が駄目な人間と思っている。7割近くは、自分が何をしても社会は変わらない、と考えている。とにかく自己肯定感が乏しく、自信のない者が多過ぎる。それは、残念ながら日本は子どもまで自殺する社会であることにも現れている。

* つい最近岐阜市に、草潤中学という不登校の子どもが通う公立の学校が開校した。見学したが、施設は立派である。問題の存在を認識していることは評価できるが、この取り組みがどうなるかはまだ分からない。

* 私は元教師だが、教師をやっていた頃、学級会で子どもが話し合っ、決めることを重視した。楽しんで学ぶことは重要だが、子どもたちに責任を持って行動することを学んで欲しかった。子どもたちの自主性を促すためには、先ず教師の側が自分たちで考えて行動することが可能でなければならない。

* 今度、教科書が変わるらしい。「主体的に考えて、意見交換しながら学ぶ」ことを重視すると言う。方向性は正しいと思う。上手く行けば好いが、そうしたことを過去に経験していない先生の側が、上手く対応できるかという疑問もある。「答えは一つではない」及び「多様性を重んじる」という方向に教育を変えることは必要だと思う。

* ライブドアの創設者で元社長の堀江氏は、収支報告書の偽造で有罪判決を受け、臭い飯を食うことになった、天国と地獄を経験した、世間の評価の分かれる人物だが、彼が個性的な人物であることは確かである。彼は、最近“非常識に生きる”という本を出しているが、この本で、教育を「かじ取りが困難な巨大な船」に例えている。一つの方向に導こうとしても、思うようには行かない。

意見交流の最後に 吉田千秋

・日本の教育の根本的な問題は、何より、多くの若者が自分は何をしたいのか分からない、という事態に表れていると思います。それは、何がしたいのか考える力を身に付けていない、ということでもあります。子どもに将来何をしたいか尋ねた最近の調査があります。これは、将来の目標(目的ではない)、即ち、どんな職業に就きたいかという、質問です。以前は、女の子なら、花屋さんとかケーキ屋さん、男の子なら、野球の選手とか博士といった答えが返ってきました。今、同じ質問に対して、男女とも、「会社員」という答えが返ってきたようです。この答えが多くを語っている様に思えます。会社と言っても色々あります。業種が違えば、することも全く違います。でも何をしたいか分からないから、こういう答えをするしかないのでしょうか。

・この間の教育行政が一貫性に欠け、不徹底であり続けていることは深刻な問題です。「ゆとり教育」や「総合科目」の提起は、方向性から言って、決して悪いものではありませんでした。余りに急な変化であったために、教師が上手く対応できませんでした。もう少し時間をかけて、思考錯誤を繰り返しても、粘り強く実現に努力すべきだったと思います。そもそも答えが一つの問題解くよりも、答えが多様であったり、不明なものは試行錯誤や、直感、感情などの力も必要で、時間がかかります。

・人間は色々な可能性を秘めています。単なる計算能

力、暗記能力で成り立つ知性より、感じる力、感得する力こそ人生を豊かにするものだと言うこともできます。これらの様々な能力によって何か新しいものを発見することは、ワクワクする楽しいことです。興味を喚起して、新しい発見をする手助けをすることが教師の仕事だと思います。

・さて、難しいことですが、学校に全てを任せるのではなく、子どもは地域で育てるって考えることが必要です。最近、子どもの安全を守るためといって、地域住民によって見回り活動が行われるようになってきました。これは教育とは異質の、単なる監視活動に過ぎません。また、学校教育を変えるといっても、教師一人ひとりが個人的に取り組んでも限界があります。「教師集団の水準」を向上させる必要があります。

・教育が大切にしなければならない理念は、自由だと思っています。教育は知性や感性を縛ったり、制約したりするものであってはなりません。変わっていること、非常識に思われることを、頭から押さえつけたり、排除したりしない様に心がける必要があります。もちろん楽しいだけでは十分ではありません。しっかり考えるためには時に我慢が必要です。苦勞してやっとたどり着けるものもあります。私たちはまだコロナ禍の難しい状況を脱してはいません。我慢は続きますが、健康に注意しながら、もう少し頑張りましょう

みなさんの感想、便り、意見など

○最近、教育について意見を述べながら疑問に思っていることがあります。それは、教育の個人に対する影響力はどのくらいあるのかなということです。教育がうまく機能すれば、いま社会的に問題になっていることがかなり解決される、と考えている人も多いのではと思います。ただ、自分はその考えにかなり疑問です。

少し前にイギリス小中学校で、健康教育をかなりの時間数行なったが貧困地域では効果がなく、高所得者が多い地域では効果があった、という報告をインターネット番組で視聴したことがある。教育をもっと限定して学校教育システムにどのくらい意味があるのが、今後の変化する社会状況の中で、そのシステムに乗るメリットおよびデメリットを議論したほうが具体的で興味深かったかなと感じました。(たなか)

○教育というテーマは非常に難しい。身近でありながら、いざ与えられると何を議論すべきかが定まらない。私的な見解ではあるが、教育には学問としての教育と、社会生活を営むための知識習得としての教育の2種類に大別できると思う。本源的な目的はおそらく後者ではないかと考えるが、数字として結果が捉えやすい前者に重点が置かれ易いのが実態だろう。

学問としての教育では、このコロナ禍でオンライン授業は極めて大きく進歩することが期待できる。教え方の上手い先生を生徒が選択できるようになり、先生の指導技術力の競争が進み、生徒の知識吸収力の効率化やレベルアップが急速に進化する。オンデマンドの授業が可能になり、必要な時に必要な知識が習得できるようになり、よりハイレベルで、かつ自分に合った授業を

選択的に受講することが可能になる。

学校の先生は学年ごとに習得すべき一定のレベルに到達しているか進捗を管理することが、学問としての教育の中心となる。むしろ大切なのは後者であり社会生活を営むための知識習得とモチベーションに重点が置かれるべきであり、そのための大事なツールとして、IT技術やDXが役立つことになるであろう。(ryosa)

○世界や日本での出来事がネットやマスコミを通じて、情報過多であるためかホントの事を見極める難しさを思う。

日本の今の政治は、「原発再稼働・汚染水を海に・日本学術会議の6名の任命拒否・公文書改竄と破棄・沖縄辺野古埋め立て・5兆円を超える軍事費」等々、市井の私ですら、それはダメだろうとわかることをなぜやろうとするのか。

話は飛躍するが、高学歴社会に何の意味もない。却って社会を悪くしているとしか思えない。大事なことは一体何なのか。今は長寿が幸せと思える社会ではない。他の生物の命を頂いてしか生きられない人間は、根本的に罪びとであると言わざるを得ない。ならば、その自覚からスタートすべきかとも。自分の中で言語化するには、まだまだ程遠く整理し切れていない。

「哲学カフェ」は哲学する場である。“哲学とは何だ”..これが哲学することだと分かるには至っていない。皆さんはどう思われますでしょうか。(ひらつか)

○三寒四温の日が続きます。その後、お身体の調子は、いかがですか。

私は、3月初めに頸椎症の痛みがあり、首にカラーを着けていたのですが、じっとしておられず、緊急事態宣言下、お忍びで伊豆大島、三原山に登りました。前日大雨だったこともあり、翌日は富士山からアルプス連山、海に浮かぶ伊豆諸島の島々を見ることができ、「美しい国だ」としみじみ思いました。下山途中、足を滑らせ左手骨折。現在、入院中です。コロナ渦で見舞いは禁止。家事、雑事からのがれ、少々、嬉しい日々です。「塞翁が馬」というのでしょうか。

哲学カフェ通信、拝見いたしました。個性的な面々の交流、生きざまが感じられる文面、楽しく読ませていただきました。映画『すばらしき世界』、私も観ました。生産効率で評価される社会のなかで、不器用に真っ直ぐ生きる姿に何故か夫の姿が重なりました。

先生、先ずはお身体、無理をして現状を悪化させませんように。(長)

○哲学カフェのお便りがくると、ああ、怒ってるのは私だけじゃない。と励まされます。原発汚染水の海洋放出

で思っていることを書きます。

復興庁が、海洋放出の安全性を訴えるPRを、不適切な「ゆるキャラ」を載せているとして公開を中止しました。その無駄になったPRは電通が作っていて、三億以上のお金が使われているということです。ありえないですよ。私を感じたのは、電通にも、復興庁にも、私たちと同じ感覚を持った人間が居ないのだろうということです。

日本を動かしている、大企業や政治の世界には、いわゆる「おっさん」しかおらず、女性や社会的弱者が採用されていません。だから、トリチウムをキャラクターにするような案を「なしでしょ、これは」と感じないのではないかと。

最近、政治が市民感覚とずれていると感じる件が多いですよ。(五輪開催なんてとくに!) それは、施政者の顔ぶれが偏りすぎ、政治がいよいよ限界な事の証拠なのではないか、と思うのですが...。(Peace! かおり)

○いつも「哲学カフェ通信」有難うございます。

コロナによる規制で限界をむかえているお店も多くあり、温室効果ガスの削減も化石燃料で動いている器具はすべて更新しなくてはいけないのかと思うとこれもまたすそ野が広いのではと感じています。一体これからどうなるのかまるで想像することができません。

次回テーマに関わって、私は女性差別を受けていると感じたことはあまりありません。特に能力がないおかげで、男性と競争しなくてはいけない状況におかれたことがないからかもしれません。優秀な女性もたくさんみえますので能力が十分に生かせる社会は大切だと思います。

それから、DVやその他の理由で母子家庭になった方で、なかなか経済的に自立できず精神的にも追い込まれている人達もたくさんいる事を思うと、女性の自立の必要性を感じます。

男性と女性はなかなかお互いに尊重しあい対等な関係を築くことが難しいように思います。本能なのか相性なのか、縦の関係と横の関係を求める者同士は価値観の違いにより共生することが困難なのではと。

協調性を重んじる女性はいつも合わせていることに疲れるのか一人の時間を必要としているように思います。必要としているものがそれぞれ違うので、不利益だと感じない選択ができる社会が必要なのかもしれません。(U・T)

○ <オリンピック考>

オリンピックの開催は、できないと思う。政府は、景気対策や内閣支持率のために、開催強行の姿勢ですが、開催まで百日を切った今、医療崩壊まで起っている状

況では開催できるわけがありません。アジアの国の中で、日本は最もコロナ対策に失敗した国です。「経済と対策の両立」と言いながら、「経済優先」施策を続けてきた結果、対策はことごとく「後手」に回りました。習近平来日のために遅らせた水際作戦の開始遅延、コロナが収束していない中での「GOTO」キャンペーンなど論外です。その結果、「習近平」の来日と同じようにオリンピック開催も実現しないこととなる。

PCR検査の能力不足、医療体制の脆弱、ワクチン確保も途上国並みという中で、オリンピックどころか、コロナ収束の見通しも立ちません。

もし、台湾のように的確なコロナ対応がなされていれば、オリンピックは開催ができて、世界から称賛されたことでしょう。日本の将来が憂慮されます。(Shigeaki)

○<内なる「偏差値」偏重に向き合う>

不登校・いじめ・自己肯定感を持ってない、日本の子どもたちの深刻な問題。これらは一向に好転する兆しが見られない。また、その背景に「過度な偏差値競争」があることは重々指摘されてきたが、こちらも緩和する方向にはない。大観すれば、2007年以来の文科省の全国学力テスト(学習状況調査)体制やOECDのPISA(学習到達度調査)から生まれる国際競争?にどっぴりと漬かっている。子どもの危機が深刻だとは思っても、〇〇県(市・地区・校)は高いのに××県は低い、日本は数学リテラシーでは何番目で読解力は十何番目だ、などと発表されると、その序列の方が重要だと感じてしまう。

現在進行中のNHKの大河ドラマ「青天を衝く」で、幕末期の渋沢栄一などの青年群像を通して、当時の大人たちが教育において重視してきた観点をいくつか見受けられることができる。そこには家族や地域の生活を支え、周りの人々を理解し人々の期待に応えていく、そんな地に着いた力を子どもに期待していることが良く分かる。

勿論その時代的制約や置かれた社会的位置に大きく影響を受けてのことだが、かれらが自分の生活に足をつけ、そこから子どもへの期待を考えていることがうかがい知れる。今の我々も自らどこに足を付けているのか、その中で「人が育つ」上で何が大事なことなのか、と率直に問う必要があるだろう。更に並行して、子どもや学校の今の事実と向き合って考える、そんな太い思考の広がりを持たれている。やがて、「偏差値」が振り回されないものになるかもしれない。

(フィリピン・ウォチャー)

○<昭和天皇の罪は戦後にもあり>

コロナのお陰と言っては憚るが読書の時間が増えたのはうれしい。そんな中で読んだ一冊を是非皆さんに紹介したい。豊下楯彦の「昭和天皇・マッカーサー会見」



作者:O.Tsumugi

(岩波現代文庫)である。大袈裟な言い方だが10年ほど前この小さな本を手にして読んだ時、軽い目眩がするほどのカルチャーショックを受けた。

昭和天皇の戦争責任というセンシティブな問題を背骨に天皇が戦後政治にどのように関わったかを、大胆にかつ詳らかに指摘したこの本は、私がそれ迄抱いていた昭和天皇に対するモヤモヤ感を一掃してくれた。昭和天皇の逝去以降、天皇と戦争にまつわる資料(昭和天皇独白録など)が出て研究が進み、戦争責任問題は学問上では決着している。だが、何故、連合国側は東京裁判で昭和天皇を訴追しなかったのか、私には謎であった。この本はその謎解きをしてくれた。これほどの研究書にこんな感想は叱られるかもしれないが、この本は第一級の推理小説を読むように面白い。

(各務原の三ちゃん)

○変化に対応していかないと生きてはいけない状況ですね。友人から「変化」ではなく「変容」という言葉を教えてもらいました。

私の職場は人事異動で、トップが変わりました。悪しき慣習から脱却していくような空気を感じています。働きやすい職場への変容、意義のある仕事への変容を期待し、積極的でありたいと思います

また、私生活での変化もありました。4人の娘は結婚して4人とも子供を授かりました。私は新しい出会いが増えていきます。私自身が「変容」していくことが幸せな生き方に繋がると感じます。

「変化」から「変容」していく時期ではないでしょうか。最近感じたことを書いてみました。(子猫)

○<汚染水処理の現実的な選択肢はある>
政府は東電福島原発の「汚染水」の海洋投棄を決定した。東電は2015年、福島県漁連に「関係者の理解なしにはいかなる処分も行わない」と示しているが、今回の決定はそれを反故(ほご)にすることであり、東電のみならず政府の無責任ぶりに憤りを感じる。それも「一度流して終わり」ではない。今後延々と流し続けることになる。この様に無責任な国の国民であることは誠に恥ずかしい。「他の国でも処理水は出し続けているから良いのだ」と言うことにはならない。

この問題に関する各社の報道には「風評被害」という用語があちこちに見られるが風評被害とは「根拠のない噂のために受ける被害」であり、今回は「風評被害以前」の状況と言える。

海洋放出を避ける選択肢は、①大型タンクによる長期保管②モルタル固化による永久処分などがあり、放射能による汚染水を海洋放出して世界中に迷惑をかけてはならない。

<「通信」前号 (No.153) を読んで>

○「通信」は例会のまとめが柱だが、例会は参加者それぞれが持つテーマに関連した科学的論理と、生活過程で発する事態とを突き合わせ融合発展させている。第153回のテーマの大意は、産業革命以後Co2(炭酸ガス)排出で気温が上昇してきて将来生物が住めなくなるかもしれない。Co2の排出を減らさなければならないということが大勢が認める科学的論理である。政府の出した2050年までに温室効果ガスをゼロにするという目標は実現可能かを問うのが今回の眼目だった。

例会で出された発言は、①火力発電以外の道へなかなか進まないこと。②政府は福島原発の処理も進まないのに、他原発の再開を推し進めようとしているのは危険である。③ならば省エネの生活が必要だが、ある程度の省エネは出来るが、便利になった生活を不便状態に戻すことはできない。④日本では公害問題を概ね解決した経験を持っている。⑤国民がその気になれば実現できるだろう。

私の感想では、困難点は実現の立場から出てきていて、このような場を通じて科学的論理と生活の場での論理が融合・充実・理解が進められたように思う。

※一人ひとりの発言をほぼ正確に記録された編集者、または記録者の 方々毎回ありがとうございます。

※153号にはほかに、感想・便り、映画の紹介、伊自良村の風景やグアテマラの祭りの多様な記事があり、楽しく読みました。
(アダム・スミス)

まだ多少の時間はあるので我々市民の声で「海洋放出」を覆してみんなで絶対に止めよう。
(井口)

○<教育を語る難しさ、易しさなどなど。>

昨年の学校臨時休業「要請」の、世間的に当たり前のような受け止め。かなりな違和感(違法性も含み)を持ちました。行政の長と繰り返した方だから？ 最近では自治体の判断が必要との議論が出始めています。地域にあった教育こそ大切ですね。日本に住む人たちは教育を「受けている」わけですので、様々な意見や思いがあることは認めざるを得ません。

一人ひとりの成長・発達のための保障がされなければなりません。また、社会(共同体)の構成員としての教養や素養も必要になってきます。さらに、成長は思春期などあり、自分の価値や存在意義を熟考する機会があります。

1985年の「ユネスコ学習権宣言」など、人、自然、社会などとの関わりや人類の文化などの英知を受け継いでいく営みを深めたいです。
(のぐち)

○日本列島に震撼が走った東北大震災から10年目の3月11日、この日の「哲学カフェ」の参加者は緊張の面持ちだった。

待ったなしの所まできている二酸化炭素削減問題について色々意見が出されたが解決の糸口は見つからない。後日この問題が話題になり、ある人が地球上に住む人間はほんの一握りだから生活のシステムを変えればエネルギーの供給は十分あると、すごく納得だがどう変えたらよいのだろう！

先日テレビで大家族と動物達の自給自足生活を紹介していた。とりわけ子供達が逞しく育っている。嬉々として力を合わせて井戸を掘っている様子が映し出されていた。今こそ私たちは生活を見直し、どう生きたらよいか問い直す必要があると感じる。

私は20年前に川口由一さんに出会い、自然農で野菜を育てている。川口さんは言う、「自然農とは野菜を育てる技術ではなく自然に添う生き方なのだ」と。この春、つくし、よもぎ、たんぽぽ、など自然の恵みをたくさんいただいた。食卓にのせる野草を一品ずつ増やしていきたい。

人生に悔いを残すとしたら、もっと旅をしたかった。そんな私をワクワクさせてくれるのが、世界一周の旅の記事だ。映画の紹介も嬉しい。

(YO)



劇団こまつ座公演『日本人のへそ』 2021年4月 名古屋

文学者の小森陽一と歴史学者の成田龍一が、その道の第一人者と井上ひさし論を展開して編んだのが『井上ひさし』を読む』(集英社新書2020)であるが、その中にある一文がずっと頭から離れなかった。いわく『日本人のへそ』の主題は井上ひさしのすべてを尽くしている…』(同書P.52)。

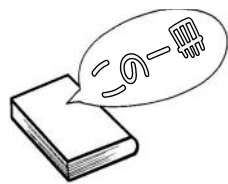
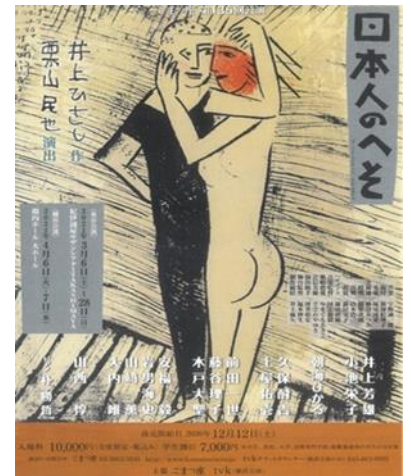
こまつ座がこの演目で公演するとあって、過日観劇に出かけた。そもそもタイトルの「日本人のへそ」とはどのような意味なのか。二転三転するストーリー展開に度肝を抜かれ、また10人ほどの役者が入れ代わり立ち代わり役柄を変えて出て来ることに右往左往しているうちに、ようやく核心部分と思しきものが見えてきた。

井上はこの戯曲で日本社会の権力構造・権力関係の深部にせまったのである。ヤクザであれ、政界であれ、力の上下関係のある所では女性が踏み台にされてい

ることを風刺し、そこに中央(東京)と地方(とくに東北)の関係性を投影して、日本社会の矛盾を暴き出しているのである。

また、井上がこのなかで女性をただ虐げられるだけの存在として描き出してはいることを強調しておきたい。女性は、たとえ踏みつけにされても、最後には一矢報いるだけのしたたかさをもった存在としてとらえられ、それゆえに最後の逆転も成り立つ。見事なできばえだった。

(ヘレン)



柳 美里(ゆう・みり)著『JR上野駅公園口』河出文庫、2017年

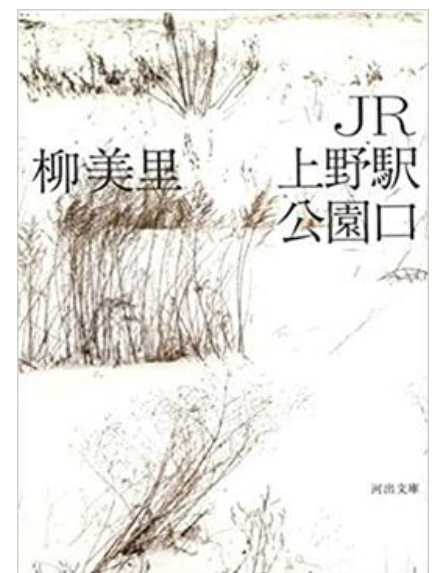
この本の主人公は、福島出身で出稼ぎ歴20年、カズさんという名の男性である。平成天皇と同じ1933年生まれだが、カズさんの人生は、一言でいえば「運がなかった」。終戦の時は12歳、戦争にはいなくて済んだが、7人もの弟妹がいたので、学校を出るとすぐに小名浜の漁港や北海道の霧多布へ出稼ぎに行った。結婚してからはオリンピック景気に沸く東京へ出稼ぎに行き、故郷に帰るのは、盆暮れの年2回のみ。子ども2人のうち、浩宮親王と同じ日にうまれた縁で浩一と名付けた男の子は、専門学校を出たものの、働きだす前に死んでしまった。この子の小さい時には遊びに連れて行くこともままならず、たった一度連れて行った遊園地では金がなくて、楽しい思いをさせてやれなかった。出稼ぎ続きで、カズさんが妻と暮らしたのは全部合わせても1年半ぐらい。二人暮らしになったその矢先に妻も死んだ。一人になったカズさんを心配して、孫娘がいっしょに住んでくれることになったが、2011年の東日本大震災が起きたとき、カズさんの目の前で津波にのまれて死んでしまった。

娘にはもう迷惑をかけたくない。カズさんはひとり列車に乗る。向かったのは上野駅。その近くにある恩賜公園には昔は仲間がいっぱいいたが、天皇家巡行の際に行われる特別清掃「山狩り」のたびに、その数は減っていき、今ではもう見知った顔はいない。「もう、いい」、カ

ズさんの頭の中には絶えず列車の音がしている。「いつも疲れていた。疲れていない時はなかった。人生に追われて生きていた時も、人生から逃げて生きてしまった時も。はっきりと生きることなく、ただ生きていた気がする。でも終わった。」

人は何のために生きるのか。ホームレスの人へのインタビューを重ねて紡がれた文章の行間からにじみ出てくるこの問いはじつに重い。2020年のアメリカの翻訳文学部門で全米図書賞を受賞したというのもうなづける。巻末に政治思想史研究者である原武史の解説「天皇制の<磁力>をあぶりだす」がつけられており、これも面白い。

(ユーマン)



<京都だより その1> 「京都の街と空襲」 *今回から数回寄せていただきます。

第二次世界大戦末期、日本の多くの都市が空襲に遭った中、「京都は免れた」と多くの人が思っているようです。しかし、比較的小規模とはいえ、西陣(上京区)・太秦(右京区)・馬町(東山区)に爆弾が落とされ、それぞれ2~50名ほどが亡くなっています。

東山区の京都市立東山総合支援学校(元市立修道小学校)の正門を入ってすぐの所に、馬町空襲の碑があり、被害が記されています。

京都新聞で何年か前の夏に、ほぼ1面を使って聴き取り等による記録を載せているのを読みました。近くに京都女子専門学校(現京都女子大学)の寮があり、学生も何人か生き埋めになったとの当時学生だった人の証言では、寮長から「親にも言うな」と鬼のような顔で言われ、他人に言えるようになるまで随分時間を要したとのこと。現在、碑の前は、生徒・教員・関係者がただ通り過ぎるだけです。

西陣や太秦の空襲の様子を記した本では、爆弾で吹き飛ばされた女性の下半身が今も残る大銀杏に逆さにぶら下がっていたとか、娘さんの遺体の一部が数百メートル先で見つかった等、酸鼻を極める様子が記されています。

原爆の被害や東京・大阪の空襲と違い小規模ではありますが、殺された一人一人や家族にとっては、苦しみ

は同じ100パーセントの事実であり、同列に語られるべきことであると思います。

一方で、京都の人は最近の戦争と言え「応仁の乱」(1467~1477年)のことを指すとの話を聞きます。何とも脳天気な話ですが、自分や身内・近所が被害に遭わなければ、人はなかなか自分ごととならないもので、また、知らないということも怖いことです。

先に紹介した京都新聞の記事や空襲の碑にある説明の文も、被害の悲惨さを訴えるばかりで、その原因となった日本の侵略行為について記述はありません。原因があって結果があり、知らなければ共感も怒りもない。馬町空襲のことを思い出しながら考えました。

(Hiroaki)



(馬町空襲の碑：筆者撮影)

<伊自良だより(付記)>

4月、伊自良は今、桜が美しい。見渡せば、伊自良地内どこにも桜が咲いている。「今植えておけば、孫子の代には美しく咲くから」と、伊自良村時代にみなで植えてきた桜だ。その桜が、ここに来て、伊自良村の遺産とともに、一部、無くなってしまうことになりそう..?

山県市発足から18年目の今年、伊自良村時代に作られて、その後もずっと使われてきた役場(現伊自良支所)、中央公民館、老人福祉センターが姿を消すことになる、というのだ。伊自良地区の住民の意見を聴くこともなく、一方的な説明会があっただけで。

『広報山県』4月号の「お知らせ広場」欄には、早速、「伊自良老人福祉センターの入浴サービスは、令和3年3月31日をもって廃止しました。皆様のご理解をよろしくお願いします。」との市福祉課の報が出された。

伊自良村時代の老人福祉センターは、薬草風呂とマッサージ器具コーナーがあり、老人なら誰でも無料で、毎日利用できるかけがえのない場であった。山県市に

なっから、遠く美山区からも市の巡回バスで多くの方が来ていらした。コロナ禍で昨年来

ずっと休止されてはいたが、コロナが収まったらまた再開されるとみな心待ちにしていたと思う。小さな「村」でできていたことが、どうして「市」でやれないのか？

お風呂がなくなれば、お年寄りが自由に集える場はなくなり、ここはもう老人福祉センターではなくなる。



旧伊自良村役場(ネットより)

だから、この建物に、廃されて売りに出される役場(現支所)と中央公民館の機能を組み入れる、という。福祉センター前にある、桜の美しい庭園も潰して、駐車場にするのだとか。

山口市になってから、村当時より減ったとはいえ中央公民館で行われていた20近くのサークル活動は、どう保証されるのか？

売りに出される役場や中央公民館の跡地は、誰が買って、何に使うのか？ 太陽光パネルがまた増えるのでは？

”文化の里”づくりを進め、旧伊自良村が大事にしてきたものが壊されていくのを見るのは、悲しい。伊自良地区の旧部落の自治会連合会で、手をつないで、なんとかこれからの道を考えていけないか…と、思っているのだが。

(あ)

<世界一周貧乏旅 その21> 「GO TO ピラミッド」

海外にいた頃の記憶を引っ張り出していると、素敵な人との出会いやなんかもありありと思い出したりします。ホステルの優しいおばちゃん、バス代を奢ってさわやかに去って行った彼、皆どうしているんだろうなあ、外国行くのにGO TO トラベル使えたらなあ。

さて、楽しい思い出ばかりを思い出せば人生はとても幸せなのですが、残念なことに楽しくなかったことを思い出すことも多々あり、そしてそれは良くない人との出会いだったりします。僕はエジプトのピラミッドの写真を見ると、いつも思い出してしまうあいつがいます。

当時、北アフリカ上陸1か国目はエジプトのカイロでした。街の中はそこらじゅうにゴミが散らばり、絶え間のない車のクラクションが印象的で、無秩序に近い車の往来はここに着く直前のイスラエルと比べると、やはり教育と発展水準は劣るのだと感じました。

僕は到着2日目に宿で仲良くなったメンバーと、有名なギザのピラミッドを観に行きました。ただ、ピラミッド周辺の商売人は人が悪いと有名で、多少の嫌な思いはするかもしれないと覚悟していました。

いざゲートをくぐると、写真で何度も見たことのある大スフィンクスが出迎え、あれ、思っていたより小さいなと感じました。というのも、その奥に見えるピラミッドが巨大すぎるせいでした。想像の中では同じスケールだった両方が、ピラミッドのあまりの大きさにスフィンクスが小さく感じてしまったようです。

早くその大きさを体感したいとピラミッドに向かって走りだそうとした矢先、通路でお土産を売っていた男が急に話しかけてきました。

「お前のつけてるそれ、なんだ？」と、僕の鞆に付いたキーホルダーを指さしました。「ああこれはペットボトルをぶら下げられるんだ、便利だろ？」

「ほお、そうか…。それをくれ」「え！？なぜ？」「いいか

ら、くれよ」。意味がわかりませんでした。買う、ならまだわかるのですが、くれ、とは。エジプト式のカツアゲなのでしょうが、7月のカイロの暑さは尋常ではなく、切り詰めた食費のせいで空腹というのもあり、僕はものすごくいらいらしていました。

「いやいや、なんでだよ。お前にあげるわけないだろ」と怒りながら言い返すと、相手の男は踵を返しながら「GO TO HELL! (地獄に落ちろ)」と僕に吐き捨て、去っていきました。

あまりの理不尽に頭が破裂するかと思いましたが、そのエネルギーはピラミッドを早く観たいという好奇心に変換されました。気付けば僕はピラミッドに向かって全力疾走していたのでした。

ピラミッドの話はまた今度にして、ひとまず今はアラビア語の暴言を学んでおくことにします。

(カモノハシタニ)



2021年前半 哲学カフェ、第25期の予定

例会は19:00~21:00です。

会場は、ふれあいスペースです。

第151回例会 1月14日(木)	「世の中を明るくするには何が必要か？」 * 新型コロナ蔓延が「永続波」となり、ワクチンのみが明るい材料。だがどうか。 * コロナ危機で新たな変革の兆しが見えてきたが、これをどう実現するのか。	中止 しました
第152回例会 2月11日(木)	「攻撃優先を進める<理論>と<予算>を問い直す？」 * コロナ対策のために膨大にふくれあがった予算は、一体どのように使われたのか。 * その影に隠れて推進される自衛隊の攻撃軍隊化。その危険な理論とムダ予算に注	中止 しました
第153回例会 3月11日(木)	「2050年までに温室効果ガスゼロは可能なのか？」 * 世界の趨勢にまったく反する政策をとってきた日本政府は、突然、ゼロ目標発表 * これはCO2ゼロではなく、原発も含めているまやかしの。これでいいのか。	終了 しました
第154回例会 4月8日(木)	「教育で大切なことは・コロナ危機を通して？」 * コロナ危機の中で、教育のあり方、内容、制度は変えざるを得ないことが生じた。 * 少人数教育へ一歩踏み出したが、リモート教育の推進、管理主義、高い教育費は	終了 しました
第155回例会 5月13日(木)	「女性観、男性観、そして人間観を問い直す」 * 東京五輪開催にからんで、やっと問題化してきた日本における女性差別の深刻さ。 * 問題の根っこは、女性<男性の差別感覚の次元から、人間観の貧しさに目を向けることではないか	
第156回例会 6月10日(木)	「SNS、スマホ、マイナンバー制の功罪を考える」 * SNS、スマホなどの情報取得・伝達・交流手段は、個々人にも大きな効果・利益をもたらす。 * だがその手段を持たない者への差別して現れ、その情報が企業・国家によって一元管理されると、国民総監視化に・・。	
第157回例会 7月8日(木)	創立13周年記念行事は休止。通常例会にします。 「資本主義って何だ、社会主義はどうなった？ この先めざす社会は？」 * ソビエト連邦の瓦解によって、資本主義は「勝利」した後、地球規模でますます強欲になり、破壊的になった。 * 残存した社会主義の多くは変質した。さて、今後めざすべき社会はどのようなものか？	

★フクシマ原発事故に抗して、忌野清志郎は声を張り上げて唱った・・”オレの脳が メルトダウン 大脳も小脳も ダウン ダウン””恐ろしい事が起ってしまった もうダメだ 助けられない もう遅い””神様 仏様 お医者様 お月様 キリスト様 科学の力を信じていたのに”と。

★そのメルトダウンしたデブリを冷やした放射能汚染水を垂れ流す無責任な行為に、笠木透はダミ声で力強く抗議した・・”海を汚すなよ 水に流すなよ わたしは恥ずかしい””海を汚すなよ 責任取れよ わたしは恥ずかしい”...と。

★それから何年も漁師たちをはじめ漁業関係者は、歯を食いしばって海の回復を待ち、漁獲の向上を計ってきた。その結果、昨年2月には福島県の実魚種の出荷制限が解除されていた・・これが正しい措置かどうかは別にして。その矢先に、政府は今年4月に2年後に海洋放流を正式決定した。

★当然、漁業関係者は怒り、韓国、中国は非難し、グリーンピースをはじめ国際団体や海外メディア

も批判的な見解を表明した。そもそも、政府はこの放射能「汚染水」を「処理水」と表現し、「多核種除去設備(ALPS)」で処理した水は、トリチウムしか残らず、これを薄めて放出すれば問題ないから「処理水」だと言う。

★だが、ごまかされてはならない。①上記の最新設備でも、トリチウムでなく、ストロンチウム、ヨウ素129などの放射性核種も残存している。②トリチウムは薄めても体内に入ると内部被曝の恐れがある。③「国連海洋法条約」では、「最善の方法」を取るよう定めているので、タンク保存を選択しないのは国際法違反である。

★安倍政権と同じく菅政権は、コロナ対策、ワクチン問題、学術会議会員任命拒否問題、贈収賄疑惑問題でもそうだが、科学的な根拠のある提案をせず、議論もしっかりしないで、独断的な結論を固執するやりかたは全く許せません。参議院議員の3つの補欠選挙で自民党全敗！ この調子で進めたいものですね。(吉田千秋)

わいわいがやがや
アラカルト